



編集後記

こんな言葉を「ご存知だろうか。」
「幹事MAX」

先日雑誌の誌面で見つけ、その意味を何人かの知人に聞いてみたが、どうやらその意味は「こういうことらしい。」

合コンの際に、幹事となる人は、ほぼ間違いなく自分より可愛い(男性の場合はイケメンか…)人を連れてこない。そうすると男女とも幹事が一番なわけで、結果的に幹事同士が引つ付いて終わるといふ、今流行りの「都市伝説」らしい。なるほど、そうすると幹事のレベルが高ければ高いほど、そこに集まるメンバーの質は向上するというわけである。

かつて本田宗一郎氏は、社長時代に自分より優れた者を次々に登用し、その技術者・開発者と丁々発止のやり取りをし、そのワイワイガヤガヤの中から

次々と新技術を生み出していったという。HONDA伝統の「ワイガヤ」である。たしかに、創業者であり宗家なればこそできる技と言ってしまうばそれまでだが、経営者として「企業をいかに発展させるか」という視点から考えれば、実に見事な手腕である。

翻つて、現在の我が国を見れば、パワハラなる言葉が横行し、優れたスタッフが次々と上に立つ者たちに押し潰されている状況が垣間見える。パワハラ自体が、大きな組織のご都合で行われているのなら大問題だが、多くの場合は上に立つ者の狭量な所作と思われるのである。

スポーツ界のみならず、政界であれ、財界であれ、同様な状況が横行していないだろうか。

下町の小さな町工場を訪ねると、現場を束ねる親方が絶対権力を握りながら、弟子たちの仕事ぶりを鼻高々に自慢するシーンに時々出くわす。そこには親方自信の自らの技術に対する揺るぎない自信が存在し、それを弟子たちが超えていくことに喜びを見出す目線が見えている。そうした目線で若者を見れば、生意気な言動や背伸びした姿勢が好ましいものとして見えてくるのは

ずだ。そうなればパワハラなどは存在する余地がない。

トップに立つものは、自らの実力を凌ぐ部下の登場に恐れをなしてはならない。その実力を見極め、適材適所に配置する度量の広さが求められるのである。知識や知恵や技術が不要というわけではないが、経営者に求められるのは「人」を見極め、いかに活かすかという伯楽としての実力と、いざ部下が困った事態に陥った際には、それを是が非でも守つてやるという姿勢なのではないだろうか。そうした視線で考えると責任を下位の者に押し付ける「蜥蜴の尻尾切り」などは最低の行為と言える。

政治の世界であれ、財界であれ、町工場であれ、オフィスであれ、上に立つ者の伯楽としての姿勢はとても重要なのである。

もちろん筆者自身もそのことは肝に銘じなければなるまい。

「編集長MAX」にならないように、素晴らしい筆者の皆さんとともに小誌をさらなる高みに押し上げていきたいと思う。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。(溪)

月刊公論 MONTHLY
KORON

5月号 第51巻5号

平成30年5月1日発行 毎月20日発売
本体価格848円(税別) 送料86円

発行人 大中吉一 編集人 林 溪清
発行所 株式会社財界通信社
〒160-0008 東京都新宿区三栄町25ポナフラービル
TEL.03-5379-5611(代)、FAX.03-5379-5616
印刷所 株式会社廣濟堂
取次店 日本出版販売/大阪屋栗田

●直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
●万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。